

ある元女性外科医のつづやき



ぴあーすクリニック院長

ピアス 洋子

今回、女性外科医ということで何か書いてほしいと、千葉大第一外科と一緒に入局した同級生の海保先生から依頼を受けた。振り返ってみるところ現在内科の開業 16 年目となり、あれだけ嫌だった外来を 1 日中やっている。本来の外科医をやめてから、17 年近くなった。私はいつ頃から外科に行こうと思ったのだろうか？

学生のころ臨床実習が始まる前、漠然と外科に行きたいと思っていた。不遜であるが外科ができれば、内科も大丈夫とたかをくくっていた。又勉強が嫌いな私は、じっくり考えるより、直ぐに切って結果を出せるのが良いと思っていた。医学部 6 年生の時に父親を膵臓癌で亡くし、漠然と消化器外科医になりたいと考えていた。女性が外科に行けるのか？という不安があった。そのころ、千葉大第一外科では、戦前に一人と昭和 53 年卒の河田（現在、幸田）滋先生が、第二外科では山室美砂子先生がいると話を聞いていた。学生のころに、両外科に女性が入局することへの考えを聞いたところ、第一外科の奥井先生は welcome、第二外科ではあまりよい感触は得られなかった。で、第一外科に入局、その後第一外科で出張の関係で千葉県立鶴舞病院（現在千葉県循環器病センター）に 2 年勤務しているうちに、同期に心臓外科を志望するものがおらず、結局心臓血管外科を専攻することとなった。高原先生の時間の短い出血が少ない手術をみて、自分もできるような気になったのもあった。

外科の中でも、心臓血管外科は女性にとって難しい分野と思う。時間に縛られ、術後も安定しない。その後大学に戻ったが、上司には増田政久先生などがいて良く御指導頂いたが、変化を求め、国循の中島伸之先生の元で 3 年間研究した。外科医が研究で臨床を離れると、やはり腕が怪しくなる。その後千葉の救急医療センターで、沖本光典先生に御指導頂き、救急の心臓血管外科を 3 年、この時期が一番臨床外科医として充実していたが、覚えているのは辛かった事である。冠動脈バイパス術をさせて頂いた時に左内胸動脈を取っている最中に麻酔の管が外れていて、低酸素脳症になった患者さんがおられた。今なら考えられないが、確か皮下酸素モニターが無かった時代だ。術中の血の色で気付くべきだったが、手技に集中していたのだろう、本当に悔やまれる。結局今年亡くなったが、県救急の皆様最後まで看取って頂いた。又上手くいったと思った僧房弁置換後に左室破裂を起こし、6 時間位押さえて止血した患者さんがいた。その方は奇跡的に回復、昨年まで私のクリニックに来てくれていた。洋子ちゃんと言って、誕生日にお花を送ってくれていたが、今心不全を起こし、又救急医療センターにお世話になっている。結果オーライなのだが、心臓周囲から血が上がって来た時の気持ちは忘れられない。本来外科医の資質としては、辛い事は忘れていかなないと前に進めないとは思いますが、自分には難しく、その様なスト

レスは心に澱の様に溜まっていくのだった。

3年たつと変化を求めてしまう私は、何の役にも立たない医学博士をとり、その後、念願の米国留学、何とか3本の論文を仕上げ、絶対しないと思っていた結婚をして、助手として大学に戻った。しかし、やはり症例数を増やして手術の腕を磨くのは日本では難しい。40代ともなり、自分の人生を考える時が来る。外科医の将来は、外科医のままで、どこかの部長になる、他の科に移るか開業、研究者となる、という選択肢しかない。自由と思った外科もやはり限界はあるのだ。アメリカのように、表面上だけでも、男女平等という社会でもない。私は無かったが、妊娠や子育てもあるとそれなりのハンディと人に迷惑をかけているという意識がつきまとう。勿論男性外科医にもそれなりの大変さはあると思うが、女性外科医で公私ともに充実できる方がいたら、相当な能力がある方が、パートナーが相当助けてくれる方であろう。アメリカから帰国した直後は、月6回の大学の当直と、6回のバイト当直で家にほとんど帰れず、夫から何でもそこまでやるのだと言われたことも、頭に開業というワードが浮かんできたきっかけである。

現在開業して、外科で身につけた技術が役立っているのは確かである。ある程度、整形外科的な診断も身に付いた。既に還暦も超えいつリタイアするか考えながら、海外旅行を楽しみに診療の毎日である。学会や学術の世界にも全く興味が無くなってしまった。外科医としては落ちこぼれなのかなとも思う。ただ自分の人生、どんどん自分の興味に合わせて変化しても、後悔が無ければよいのかなとも思う。その位の居直りがないとやっていけないかもしれない。当院にも心臓外科から、バリバリ仕事をしながら、子供も作った女医さんがパートに来て頂いている。時代は少しずつ変化しているのか、とも思う。男性も女性も女は家にいた方がよいと考えている日本人の中で、glass ceilingが壊れて、女性外科医が、公私ともに充実、教授になったり、学会の重鎮になる女性外科医が日本でもたくさん出てほしい。手術の技術は性差ではなく、本人のセンスによると思う。

とりとめのない、随想になってしまった。今は外科医になった事には後悔はないものの、中途半端ではあったかと思う。結局、ま、いいかと思いながら日々を過ごしている。